

定年退職後の心のあり様尺度 (PSAR) の開発

タニグチ チ エ オ ノ ミ ツ キ キ タ モ ト コ ヒ サ タ ミ ツ ル
谷口 千絵*¹ 小野 美月*² 北 素子*³ 久田 満*⁴

目的 本研究の目的は、定年退職後の心のあり様尺度（以下、PSAR）を開発し、信頼性の検討および関連する要因を明らかにすることである。

方法 2017年12月時点でWeb調査会社に登録している人で、日本国内の企業に勤続し、定年退職を経験した60-74歳の男性308人を対象とした。PSARの暫定46項目について探索的因子分析を行った。抽出された各因子と退職後の人生設計、退職前から続けている趣味、現在のコミュニティへの関与度、現在の経済状況、現在の主観的身体健康状態、基本属性について、対応のない *t* 検定、一元配置分散分析を行い、有意な場合は多重比較を行った。さらに、各因子を従属変数とする重回帰分析を行った。

結果 3因子23項目が抽出された。第1因子10項目は〔定年後充実感〕、第2因子7項目は〔人生終わった感〕、第3因子6項目は〔現役への未練〕とした。Cronbachの α 係数は、それぞれ0.84, 0.83, 0.73であった。〔定年後充実感〕は、趣味があり、同居人がいて、既婚者で、大学/大学院を卒業した群が高い得点であった。現在の経済状況を「苦しい」、健康状態を「不健康」、コミュニティへ「関わりはない」と回答した群の得点が低かった。〔人生終わった感〕は、定年退職前から続けている趣味がない群の得点が高かった。現在の経済状況が「苦しい」、健康状態を「不健康」、退職後の人生設計を、「考えていなかった/漠然と考えていた」と回答した群は高い得点であった。〔現役への未練〕は、現在パート・アルバイトに就いている群が高い得点で、コミュニティへ「関わりがない」、健康状態を「不健康」と回答した群の得点が低かった。重回帰分析の結果、〔定年後充実感〕は、定年退職前に考えていた人生設計があり、趣味があり、現在の経済状況に余裕があり、健康であると認識しているほど高かった。〔人生終わった感〕は、退職後の年数が浅く、定年退職前に考えていた人生設計がなく、現在の経済状況に余裕がないほど高かった。〔現役への未練〕は、現在のコミュニティへの関与度が高く、パート・アルバイトに就いており、経済状況に余裕がなく、退職後の年数が浅いほど高かった。

結論 定年退職後の男性を対象とし、定年退職後の人生や生活を営む過程における心の状態を客観的に把握するための心理尺度として〔定年後充実感〕〔人生終わった感〕〔現役への未練〕の3因子23項目が明らかになった。

キーワード 定年退職、心のあり様、男性、尺度の開発、退職移行期、人生設計

I 緒 言

定年退職は、労働者がそれまでの長期にわた

り築いてきた活動の場や役割、対人関係、社会的評価を一挙に喪失するため、再適応に問題が生じる出来事である¹⁾。その一方で、超高齢化

* 1 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科教授

* 2 石神井公園クリニック・石神井公園カウンセリングセンター臨床心理士・公認心理師

* 3 東京慈恵会医科大学医学部看護学科教授 * 4 上智大学総合人間科学部心理学科教授

の進むわが国において定年退職後の人々を社会の重要な役割を担うアクティブな世代の一員として捉え直す必要がある²⁾³⁾。先行研究では、特に男性の労働者にとって、定年退職後の役割喪失がアイデンティティの危機となり、労働生活で身につけた強固なアイデンティティから脱出して適応していくことが困難な課題であることがわかっている^{4)~8)}。

そこで、本研究では定年退職後の男性を対象として、彼らの心の状態について客観的に把握するための心理尺度（定年退職後の心のあり様尺度：Psychological State After Retirement；以下、PSAR）を開発し、作成した尺度を用いて、どのような要因が定年退職後の心の状態に影響を及ぼしているのかを明らかにする。本研究で得られた知見は、定年退職後の心理的問題に対する早期発見や必要な社会的支援の提供、そして退職前の人々がどのような就労生活を送ることが老年期の人生を豊かにするのか考えるための予防的なアプローチの提案・実行につながる事が期待される。

II 方 法

(1) 調査対象とデータ収集

(株)マクロミルのインターネットパネルデータベースから、定年制度のある日本国内の企業に勤続し、定年退職を経験した60歳から74歳の男性モニター308人を対象にインターネット調査を実施した。調査期間は2017年12月であった。

(2) 調査内容

1) 定年退職後の心のあり様尺度 (PSAR)

先行研究¹⁾²⁾および本研究に関連する一般書籍の記述^{9)~12)}を参考に、「感情面」「認知面」「行動面」の領域を仮定し、46個の暫定項目を作成した。各項目に対して、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求め、それぞれ5点から1点で換算した。

2) 退職後の人生設計

回答は4段階で、「具体的に考えていた」を4点、「大まかに考えていた」を3点、「漠然と

考えていた」を2点、「考えていなかった」を1点とした。

3) 退職前から続けている趣味

回答は6段階で、「30代から続けている」5点、「40代から」4点、「50代から」3点、「60代から」2点、「70代から」を1点とし、「定年退職前から今でも続けている趣味はない」は0点とした。

4) 現在のコミュニティへの関与度

回答は4段階で、「熱心に関わっている」4点、「まあまあ熱心に関わっている」3点、「あまり熱心に関わっていない」2点、「そのような関わりはない」を1点とした。

5) 現在の経済状況

回答は5段階で、「余裕がある」5点、「やや余裕がある」を4点、「普通」を3点、「やや苦しい」を2点、「苦しい」を1点とした。

6) 現在の主観的な身体的健康状態

回答は4段階で、「とても健康」4点から「不健康」1点とした。

7) デモグラフィック要因

年齢、退職後の年数、退職時の業種、最も長く働いていた会社の規模、退職時の役職、最終学歴、現在のパート・アルバイトの就労状況、婚姻状況、子どもの有無、同居人の有無、介護状況、について回答を求めた。

(3) 分析方法

PSARの暫定46項目について、探索的因子分析を行った。可能な限り項目数を少なくするため因子負荷量0.50以上を基準とした。PSARの各因子と関連要因の検討には、対応のない t 検定、3群以上に分けることが可能な項目には一元配置分散分析を行い、5%水準で有意な場合はBonferroni法による多重比較を行った。さらに、PSARの3つの下位尺度得点を従属変数とする重回帰分析を行った。説明変数は以下の12要因とした。即ち、①婚姻状況、②退職後の年数、③退職した会社の規模、④退職時の役職、⑤現在のパート・アルバイトの就労状況、⑥退職後の人生設計、⑦現在のコミュニティへの関わり、⑧定年前から続けている趣味、⑨学歴、

⑩現在の経済状況、⑪現在の主観的な身体的健康状態、⑫介護状況である。

分析は、IBM SPSS Statistics 25を使用した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、上智大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を得て行った（承認番号2017-84、承認日2017年11月28日）。Web調査のトップページに本研究の目的と趣旨、調査内容およびプライバシーへの配慮、回答を途中で中止することが可能であること、研究協力の中止に伴う不利益を受けないこと、データは厳重に管理されることについても明記した。

表1 回答者の特徴 (N=308)

	人数 (%)
年齢	
60-64歳	50(16.2)
65-70	157(51.0)
70-74	101(32.8)
退職後年数	
1年以上-5年未満	108(35.1)
5年以上-10年未満	121(39.3)
10年以上	79(25.6)
退職時の業種	
事務・オフィス系	108(35.1)
販売・営業・飲食・サービス業	48(15.6)
IT・エンジニア系	44(14.3)
WEB・クリエイター系	1(0.3)
医療・介護・研究・教育系	22(7.1)
工場・軽作業・物流・土木系	46(14.9)
その他	39(12.7)
最も長く働いた会社の規模	
49人以下	38(12.3)
50-299人以下	63(20.5)
300-999人以下	54(17.5)
1,000-9,999人以下	85(27.6)
10,000人以上	57(18.5)
不明	11(3.6)
退職時の役職	
一般社員クラス	77(25.0)
係長クラス	36(11.7)
課長クラス	80(26.0)
次長クラス	20(6.5)
部長クラス	53(17.2)
役員クラス	30(9.7)
その他	12(3.9)
最終学歴	
中・高・短大卒	117(38.0)
大・院卒	191(62.0)
現在のパート・アルバイト	
就いていない	247(80.2)
就いている	61(19.8)
婚姻状況	
未婚	32(10.4)
既婚	276(89.6)
子ども	
無し	45(14.6)
有り	263(85.4)

Ⅲ 結 果

(1) 対象者の特徴 (表1)

対象者の平均年齢は、67.9 (標準偏差3.3) 歳で、65~70代の中間層が157人 (51.0%) と最も多かった。退職時の業種は多様で、事務・オフィス系の業種を退職した人が108人 (35.1%) で最も多かった。

(2) 定年退職後の心のあり様尺度 (PSAR) (表2)

暫定46項目の回答分布から、フロア効果と考えられる3項目を除外し、43項目を因子分析の対象とした。プロマックス回転による探索的因子分析を行い、固有値およびスクリープロットを参考に3因子解が妥当であると判断した。3因子を仮定して探索的因子分析を再度行った。因子負荷量0.50以上を基準に二重負荷項目23項

表2 定年退職後の心のあり様尺度 (PSAR) の因子分析結果 (Promax回転後)

	I	II	III
I 定年後充実感 (α=0.84)			
贅沢に時間を過ごしている	0.70	0.09	-0.04
現役時代よりも気持ちが楽になった	0.69	0.22	-0.22
今の私はいきいきしている	0.68	-0.19	0.15
定年退職後の方が活気に溢れている	0.64	-0.11	-0.01
毎朝、一日のはじまりにわくわくしている	0.64	-0.07	0.15
定年退職は第二の人生のスタートだ	0.63	-0.01	0.22
どんな業界にも世代交代が必要だ	0.63	0.23	-0.17
充実した生活を送っている	0.60	-0.27	0.11
人生は引き際が大事だ	0.55	0.31	-0.19
定年退職後も、自分の人生の目標ややるべきことがはっきりしている	0.52	-0.23	0.15
II 人生終わった感 (α=0.83)			
定年退職によって強制的に社会から切り離されたように感じる	0.08	0.80	0.16
何を着て外に出かければよいかわからない	0.24	0.78	-0.08
孤独を感じるが増えた	-0.09	0.73	0.01
定年退職を迎え、自分は「終わった」と思った	-0.07	0.71	-0.01
どこにも所属しないことが苦痛に感じる	-0.05	0.69	0.23
人と話をする時、仕事のことしか話題がない	0.11	0.63	0.23
現役時代の自分を知っている人とは会いたくない	0.12	0.57	-0.38
III 現役への未練 (α=0.73)			
「生涯現役」で人生を歩み続けたい	0.08	0.06	0.69
これまでの職歴を活かして新しい仕事につきたい	-0.20	0.11	0.69
定年退職後、改めて働くことの意義を感じた	-0.07	0.14	0.65
もっと現役で働いていたかった	-0.09	0.37	0.61
定年退職後も、もとい職場の人たちとの関係を続けたい	0.08	-0.05	0.56
定年退職後にも職場に自分がいた痕跡を残せていると思う	0.13	-0.13	0.51
因子間相関 I		-0.49	0.07
II			0.35
III			

表3 定年退職後の心のあり様尺度 (PSAR) の3つの下位尺度得点とその関連要因

	I 定年後充実感				II 人生終わった感				III 現役への未練			
	平均値	標準偏差	p	多重比較	平均値	標準偏差	p	多重比較	平均値	標準偏差	p	多重比較
定年前からの趣味 ¹⁾												
なし	3.14	0.57			2.36	0.64			2.68	0.73		
あり	3.63	0.09	***		2.02	0.67	***		2.71	0.73	n.s.	
最終学歴 ¹⁾												
中・高・短大卒	3.44	0.59			2.16	0.72			2.65	0.73		
大・大学院卒	3.58	0.59	*		2.05	0.66	n.s.		2.73	0.73	n.s.	
現在のパート・アルバイト ¹⁾												
就いていない	3.53	0.60			2.11	0.68			2.61	0.71		
就いている	3.51	0.56	n.s.		2.02	0.67	n.s.		3.07	0.69	***	
婚姻状況 ¹⁾												
未婚	3.24	0.56			2.23	0.67			2.52	0.69		
既婚	3.56	0.59	**		2.08	0.68	n.s.		2.72	0.73	n.s.	
子ども ¹⁾												
なし	3.54	0.53			2.07	0.78			2.72	0.69		
あり	3.53	0.60	n.s.		2.10	0.66	n.s.		2.70	0.74	n.s.	
同居人 ¹⁾												
なし	3.19	0.73			2.17	0.62			2.46	0.68		
あり	3.56	0.56	**		2.08	0.69	n.s.		2.73	0.73	n.s.	
介護状況 ¹⁾												
していない	3.47	0.62			2.23	0.90			2.80	0.76		
している	3.54	0.59	n.s.		2.08	0.65	n.s.		2.69	0.73	n.s.	
退職後の人生設計 ²⁾												
1 考えていなかった	3.20	0.67		1<3*** 1<4***	2.38	0.71		1>3*** 1>4**	2.60	0.75		
2 漠然と考えていた	3.40	0.56		2<3*** 2<4***	2.21	0.72		2>3*** 2>4*	2.76	0.72		
3 大まかに考えていた	3.75	0.46	***		1.90	0.51	***		2.68	0.74	n.s.	
4 具体的に考えていた	3.82	0.50			1.83	0.68			2.73	0.71		
現在のコミュニティへの関与度 ²⁾												
1 関わりはない	3.43	0.60		1<3*	2.12	0.68			2.53	0.74		1<2* 1<3*
2 あまり熱心に関わっていない	3.57	0.62			2.11	0.72			2.83	0.72		
3 ままあ熱心に関わっている	3.71	0.49	**		2.01	0.61	n.s.		2.99	0.57	***	
4 熱心に関わっている	3.81	0.27			1.98	0.76			2.96	0.70		
現在の経済状況 ²⁾												
1 苦しい	2.80	0.60		1<2*** 1<3***	2.64	0.92		1>2* 1>3***	2.75	0.84		
2 やや苦しい	3.41	0.57		1<4*** 1<5***	2.15	0.63		1>4*** 1>5***	2.80	0.76		
3 普通	3.58	0.49	***	2<4*** 2<5*	2.06	0.59	***		2.64	0.74	n.s.	
4 やや余裕がある	3.87	0.51		3<4**	1.91	0.68			2.78	0.60		
5 余裕がある	3.84	0.51			1.75	0.63			2.68	0.63		
現在の身体的健康状態 ²⁾												
1 不健康	2.97	0.79		1<2*** 1<3***	2.53	0.95		1>2* 1>3***	2.43	0.82		1<3*
2 やや不健康	3.44	0.53		1<4*** 2<3*	2.13	0.62		1>4**	2.59	0.75		
3 健康	3.65	0.51	***	2<4**	2.01	0.61	***		2.81	0.67	*	
4 とても健康	3.92	0.52			1.88	0.81			2.80	0.85		
年齢 ²⁾												
1 60-64歳	3.44	0.68			3.53	0.59			2.71	0.77		
2 65-70歳	3.57	0.57	n.s.		2.16	0.75	n.s.		2.66	0.72	n.s.	
3 70-74歳	3.51	0.57			2.08	0.68			2.76	0.73		
定年退職後の年数 ²⁾												
1 1年以上-5年未満	3.47	0.63			2.18	0.75			2.83	0.74		
2 5年以上-10年未満	3.58	0.58	n.s.		2.06	0.65	n.s.		2.62	0.70	n.s.	
3 10年以上	3.55	0.55			2.01	0.62			2.65	0.74		
最も長く働いた会社の規模 ²⁾												
1 49人以下	3.37	0.54			2.46	0.88		1<2* 1<4**	2.75	0.58		
2 250-299人以下	3.52	0.65			2.04	0.65			2.69	0.77		
3 300-999人以下	3.53	0.50			2.06	0.66			2.72	0.69		
4 1,000-9,999人以下	3.61	0.63	n.s.		2.01	0.64	*		2.63	0.74	n.s.	
5 10,000人以上	3.59	0.58			2.08	0.59			2.81	0.81		
6 不明	3.18	0.33			1.96	0.64			2.48	0.70		
退職時の役職 ²⁾												
1 一般社員・係長クラス	3.40	0.64		1<2* 1<3*	2.17	0.69			2.55	0.75		1<2*
2 課長・次長・部長クラス	3.59	0.55			2.05	0.64			2.75	0.71		
3 役員クラス	3.75	0.50	**		2.00	0.78	n.s.		2.86	0.70	*	
4 その他	3.38	0.51			2.18	0.87			3.06	0.59		

注 1) 対応のないt検定
 2) 一元配置分散分析, Bonferroni法による多重比較
 3) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$, n.s.有意差なし

目を削除した結果、3因子23項目が抽出された(表2)。

第1因子は、定年退職後の現在の生活や今後の人生に関する肯定的な内容の10項目で、〔定年後充実感〕と命名した。第2因子は、定年退職を契機に現在の状況を否定的に捉え、その先の人生への絶望感が表れている内容の7項目で、〔人生終わった感〕と命名した。第3因子は、定年退職後の現在から、現役時代のことについて言及している内容の6項目で、〔現役への未練〕と命名した。各因子の合計得点が高いほど〔定年後充実感〕、〔人生終わった感〕、〔現役への未練〕のそれぞれをより強く感じていることを意味する。

本尺度の内的整合性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、〔定年後充実感〕が $\alpha = 0.84$ 、〔人生終わった感〕が $\alpha = 0.83$ 、〔現役への未練〕が $\alpha = 0.73$ であった。

(3) PSARの関連要因

PSARの3つの下位尺度得点と関連する要因を検討した(表3)。

〔定年後充実感〕は、趣味があり、同居人がいて、既婚者で、大学あるいは大学院を卒業した群が有意に高い得点であった。また、現在の経済状況については、「苦しい」と回答した群が、その他の群よりも有意に低く、「やや苦しい」と回答した群は「やや余裕がある」「余裕がある」と回答した群よりも有意に低かった。「不健康」と回答した群はその他の群よりも低い得点であった。定年前に考えていた退職後の人生設計については、「考えていなかった」「漠然と考えていた」群が、「大まかに考えていた」「具体的に考えていた」群よりも有意に低い得点であった。退職時に「一般社員・係長クラス」であった群が、「課長・次長・部長クラス」「役員クラス」であった群よりも有意に低い得点を示していた。また、現在のコミュニティへの関与度については、「関わりはない」と回答した群の得点が最も低かった。

〔人生終わった感〕では、定年退職前から続けている趣味がない群がより得点が高かった。

表4 定年退職後の心のあり様尺度(PSAR)の3つの下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析の結果

	I 定年後 充実感	II 人生 終わった感	III 現役への 未練
	β	β	β
婚姻状況	0.10*	-0.02	0.06
退職後の年数	0.04	-0.12*	-0.14*
退職した会社の規模	0.01	-0.05	0.02
退職時の役職	0.03	0.01	0.18**
現在のパート・アルバイト	-0.08	-0.04	0.18**
退職後の人生設計	0.18***	-0.19**	-0.04
現在のコミュニティとの関わり	0.06	0.05	0.21***
定年前からの趣味	0.20***	-0.12*	-0.01
最終学歴	-0.02	0.01	0.00
現在の経済状況	0.27***	-0.17**	-0.15**
現在の身体的健康状態	0.20***	-0.11	0.12
介護状況	-0.02	0.05	0.02
R^2	0.37***	0.17***	0.18***

注 β : 標準偏回帰係数, R^2 : 決定係数
* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

現在の経済状況について「苦しい」と回答した群の得点その他の群よりも得点が高かった。現在の身体的健康状態を「不健康」と回答した群がその他の群よりも得点が高かった。定年前に考えていた退職後の人生設計については、「考えていなかった」「漠然と考えていた」と回答した群は、「大まかに考えていた」「具体的に考えていた」群より高い得点を示した。

〔現役への未練〕では、現在のパート・アルバイトに就いている群の方が有意に高い得点であった。現在のコミュニティへの関与度については「関わりがない」と回答した群が低い得点であった。また、退職時の役職については、「一般社員・係長クラス」であった群が「課長・次長・部長クラス」よりも有意に低い得点が示された。そして、現在の身体的健康状態については、「不健康」と回答した群の得点が「健康」と回答した群よりも有意に低かった。

〔定年後充実感〕は、定年退職前に考えていた人生設計があり、定年退職前から趣味があり、現在の経済状況に余裕があり、現在の身体的健康状態が健康であるほど高かった。〔人生終わった感〕は、退職後の年数が浅く、定年退職前に考えていた人生設計がなく、現在の経済状況に余裕がないほど高かった。〔現役への未練〕は、現在のコミュニティへの関与度が高く、現在パート・アルバイトに就いており、現在の

経済状況に余裕がなく、退職後の年数が浅いほど高かった(表4)。

Ⅳ 考 察

〔定年後充実感〕が低く、〔人生終わった感〕〔現役への未練〕が高い定年退職後の男性は、身体的健康状態をより不健康と捉えていることが示された。PSARは身体的健康状態を予測する可能性もあり、今後さらに検討していく必要がある。〔定年後充実感〕〔人生終わった感〕〔現役への未練〕を従属変数とする重回帰分析の結果、「現在の経済状況」がすべての因子への影響を示しており、定年退職後の心の状態に対して特に重要な要因であることが明らかになった。定年退職後には経済的基盤が重要であると指摘した研究¹³⁾と同様の傾向を示すものであり、経済状況は定年退職後の心の状態に大きな影響を及ぼすことが再確認された。

〔定年後充実感〕と〔人生終わった感〕に影響を及ぼす要因はおおむね共通していた。「現在の経済状況」に加え、「定年前に考えていた退職後の人生設計」「定年前から続けている趣味」であった。定年前から考えていた退職後の人生設計については、現役時代に漠然と思い描いているのではなく、ある程度の具体性を持って考えておくことが重要であることが示唆された。定年後に趣味をもとに新たな活動を見だし、充実した生活を送る退職者がいることや⁹⁾、現役労働者において趣味が生きがいに強く関与しており、退職後の生活の準備として趣味をもつことは就労中のみならず、退職後の心理状態に良い影響を及ぼすことが明らかになっている¹⁴⁾。ただし、Yeung¹⁵⁾の研究によると、退職前の計画は経済面や健康面に有効かつ生活満足度の向上に貢献するが、社会的関わりに関しては詳細な計画を立てると逆に適応しにくくなることがわかっている。そのため、退職移行期における人生設計に関しては、家計や健康管理についての具体的な計画は推奨されるが、地域社会や人との関わりというような、他者および環境要因によって左右される計画については具体

的に考えすぎずに、様々な可能性を持つ柔軟な人生設計が望まれよう。

〔人生終わった感〕と〔現役への未練〕は、退職後の年数が増えるほど徐々に緩和されていくことが示された。そのため、定年退職後の心の状態のプロセスは、定年退職後の年数が浅い時期には〔現役への未練〕に始まり、同時に〔人生終わった感〕を抱えている場合が考えられる。その後、時が経つにつれて〔現役への未練〕は緩和されていき、〔定年後充実感〕につながる、もしくは〔人生終わった感〕を経て〔定年後充実感〕に移行していくというプロセスが考えられる。このプロセスを踏まえると、定年退職者の心の状態の経過としては、〔現役への未練〕から〔人生終わった感〕を経たとしても、最終的に〔定年後充実感〕が高まっていくことが理想的であると考えられる。そして、退職後の年数が経過しても長期間にわたり〔人生終わった感〕を抱えている人がハイリスクグループであると推察され、その心の状態に対するなんらかの支援が必要であると考えられる。

本研究の限界として、インターネット調査の特性上、インターネットの使用が可能な対象となっており、サンプルバイアスが考えられる。現時点では男性のみを対象に検証した尺度であるが、女性の社会進出が進み、今後女性の定年退職者が増えることが予想されるため、性別にかかわらず本尺度が使用できるか検討する必要がある。

開示すべきCOI状態はない。

文 献

- 1) 西村純一. 定年退職期の社会的ネットワークの変化の認知に関連する要因の検討. 社会心理学研究 1993; 8(2): 76-84.
- 2) 西田厚子, 堀井とよみ, 筒井裕子, 他. 自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究. 人間看護学研究 2006; 4: 75-86.
- 3) 袖井孝子. 高齢者は社会的弱者なのか: 今こそ求められる「老いのプラン」. 京都: ミネルヴァ書房, 2009.
- 4) Davies E & Cartwright S. Psychological and psy-

- chosocial predictors of attitudes to working past normal retirement age. *Employee Relations* 2011 ; 33(3) : 249-68.
- 5) Lusardi A & Mitchell OS. Baby boomer retirement security : The roles of planning, financial literacy, and housing wealth. *Journal of Monetary Economics* 2007 ; 54(1) : 205-24.
 - 6) 岡本祐子. 生涯発達心理学の動向と展望. *教育心理学年報* 1994 ; 33 : 132-43.
 - 7) 岡本祐子. 生活の質と精神的充足感から見た生涯学習ニーズ : 成人期の「アイデンティティ探求」ニーズの分析. *広島大学大学院教育学研究科紀要* 2005 ; 53 : 175-83.
 - 8) 西田厚子. 定年退職者のアイデンティティ再構築. *日本家政学会誌* 2011 ; 62(5) : 265-76.
 - 9) 楠木新. 定年後. 東京 : 中央公論新社, 2017.
 - 10) 内館牧子. 終わった人. 東京 : 講談社. 2015.
 - 11) 片桐恵子. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会. 2012.
 - 12) ケネス・S・シュルツ監修 (藤井留美訳). *リタイアの心理学—定年の後をしあわせに生きる*. 東京 : 日経ナショナルジオグラフィック社. 2017.
 - 13) 林文俊, 松浦いね, 松浦均, 他. 定年退職者の在職中の経験と退職後の生きがい. *経営行動科学* 1990 ; 5(1) : 27-38.
 - 14) 長野誠治. 第6回サラリーマンの生活と生きがいに関する調査 : 企業年金のあるサラリーマンにおける過去の調査との比較. *年金研究* 2017 ; 7 : 154-78.
 - 15) Yeung DY. Is pre-retirement planning always good? An exploratory study of retirement adjustment among Hong Kong Chinese retirees. *Aging & Mental Health* 2013 ; 17(3) : 386-93.